

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00864

研究課題名(和文) Cooperative Learning and Japanology: Development of an Intercollege Program for Japanese and International Students

研究課題名(英文) Cooperative Learning and Japanology: Development of an Intercollege Program for Japanese and International Students

研究代表者

金志 佳代子 (Kinshi, Kayoko)

兵庫県立大学・国際商経学部・教授

研究者番号：20438253

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、協働学習のアプローチを中心に、兵庫・福岡・沖縄の大学で学ぶ日本人学生・外国人留学生在が、学び合うことを目的としたプロジェクト型学習を実施した。まず、兵庫県、福岡県の通訳案内士に半構造化面接を実施した結果、日本国内の異なる地方文化に暮らす学生同士のEメールを通じたコミュニケーションにも活用できる多くの知見が得られた。また、3年にわたり、日本の3大学間での協働学習の実施と効果の検証を行った。その結果、学生が英語でコミュニケーションをはかることについて自信を持つようになったことが明らかになった。本研究結果は、今後の協働学習への改変と、本プロジェクトの継続につながる重要な研究成果となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本の3大学(兵庫・福岡・沖縄)で学ぶ日本人学生・日本語を第一言語としない外国人留学生在が英語による協働学習を行い、地方の文化、伝統、歴史について学び合うプロジェクト型学習を実施した。協働学習を実施するにあたり、各地域の通訳案内士への半構造化面接を実施し、そこから得られた知見をもとに、プログラムに修正・改良を加えることで、学習者にとって実践可能なプログラムとなった。学習者が協働学習を通じて、英語を使用して自らの日本文化を広めることで、英語を共通言語(English as a Lingua Franca, 以下、ELF)として体験するという点で意義深い研究である。

研究成果の概要(英文)：Focusing on a collaborative learning approach, this project-based study was conducted with Japanese and international students studying at universities in Hyogo, Fukuoka, and Okinawa with the aim of learning from each other. First, we conducted semi-structured interviews with tour guides in Hyogo and Fukuoka, and gained insights that could be used for communication via e-mail between students living in different places in Japan. In addition, over a three-year period, we conducted a collaborative learning project among three Japanese universities and verified its effectiveness. The results showed that students became more confident about communicating in English. The results of this research are important for future modifications to collaborative learning and for future projects.

研究分野：英語学、英語教育

キーワード：協働学習 大学間交流 ELF CLIL ジャパノロジー

1. 研究開始当初の背景

本研究は、協働学習を通じて英語のプロジェクト型学習を開発し、大学間協働学習を実施するものである。本プロジェクト開始時まで、多様な文化を持つ人々とコミュニケーションできるグローバル人材の育成を目指して、協働学習に取り組んできた。本研究では、協働学習用に作成されたプログラムが、学習者自身の学びを最大限に高める指導ツールとして機能し、教師はプロセス全体を通じて学生の活動をモニターする役割を担うことになる。

持続可能な開発目標、特に持続可能な都市とコミュニティの観点から日本学 (Japanology) に関する情報を提供するグローバル人材の育成に貢献することを目標に、協働学習を通じて、兵庫、福岡、沖縄の大学の日本人学生と外国人留学生が、異文化コミュニケーションと共通語としての英語 (ELF) の知識の習得を目指してきた。ELF とは、母語が異なる者同士が英語でコミュニケーションをとることを指す (Seidlhofer 2001; Jenkins 2003, 2006) が、研究開始当時の 2018 年、日本学生支援機構 (JASSO) のデータによると、279,250 人の留学生 (全体の 93.4%) が中国、ベトナム、ネパール、韓国などのアジア諸国から来日していた (JASSO, 2018)。日本語を学んだことのないこれらの学生は、共通のコミュニケーション手段として英語を使用するため、日本の高等教育では、日本人教師 (ELF 話者) が日本人学生と留学生 (ELF 話者) を教える際に、英語を教授言語 (EMI) として使用するのが一般的である。Stewart (2016) は、英語教授法 (ELT) の分野では、教師と学生のコラボレーションに基づいてイノベーションを起こす必要があると指摘していることから、学習者のニーズを満たす効果的な方法は、異なる文化や背景を持つ人々の相互理解を促進する協働学習であり、これに基づいたプロジェクト型学習を構築することが当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、持続可能な開発目標の観点から、ELF 話者間の大学間協働学習を構築することである。協働学習を通じて学習者が自らの日本文化を広め、英語能力を向上させるという点で、本研究は日本全国の大学で適用できる学習方法である。研究開始時は、兵庫、福岡、沖縄の大学で学ぶ大学生が参加し、他大学の学生とのメール交換を通じて、地元の名物、祭り、工芸品、ランドマーク、産業などの地域文化に関する情報を日本人や留学生を含む学生間で共有できるようにプログラムを進めた。また、このメール交換プログラムは日本学 (Japanology) に基づいているため、ユニバーサル・デザインや和食などの食文化用語など、さまざまなトピックを学び、語彙を増やすことで言語能力を向上させることが可能になる。

3. 研究の方法

(1) 初年度は、研究課題の通訳案内士を対象とした研究動向に関する情報収集に先んじて、「観光英語」「通訳ガイド」を対象とした「科研費採択課題」について検討を行った。「科研費データベース」の検索機能でヒットした「観光英語」「通訳ガイド」のうち、英語教育に関する国内の研究プロジェクト (9 件) について考察した結果、研究対象者として、外国人留学生を明示的に含んでいるものがないことが明らかとなった。また、本研究で研究対象とする兵庫県、福岡県、沖縄県の 3 県は含まれていなかった。そのため、研究課題「協働学習のための教材およびプログラム作成」と「地方からの英語による発信」のため、現地の文化に精通している通訳案内士のうち、兵庫県 (含む大阪府在住者) 6 名、福岡県 10 名で活動している対象に対して半構造化面接を実施し、それぞれの地域特有の観光名所、祭り、郷土料理、工芸などについての情報収集を行った。

さらに、研究課題「日本の 3 大学 (兵庫・福岡・沖縄) における大学間および大学内での協働学習の実施と効果の検証」では、兵庫、福岡、沖縄の大学生 (外国人留学生、日本人学生) を対象に、Eメールによる大学間協働学習を実施した。地方都市の 3 大学、異なる専攻分野で学ぶ 42 名の学生による協働学習では、共通のトピック (自己紹介、出身地、食、祭り、工芸品) にもとづく Eメール交換を実施した。プログラム実施中は担当教員による参与観察を行い、互いの地域文化を英語で学び合う協働学習による学生の言語運用能力、異文化コミュニケーション能力を測定し、その効果を検証した。さらにプログラム実施前と実施後は、プログラム参加学生を対象とした質問紙調査を行い、学生からの回答結果をもとに、次年度の大学間協働学習のプログラム内容について再検証を行った。

(2) 研究実施期間の 2 年目は、課題研究に関する研究を行った。兵庫、福岡、沖縄の大学生 (外国人留学生、日本人学生) を対象に、2 年目となる Eメールによる大学間協働学習を実施した。地方都市の 3 大学、異なる専攻分野で学ぶ 30 名の学生による協働学習では、共通のトピック (自己紹介、出身地、食、祭り、工芸品) にもとづく Eメール交換を実施した。プログラム実施中は担当教員による参与観察を行った。さらにプログラム実施前と実施後は、プログラム参加学生を対象とした質問紙調査を行い、学生からの回答結果をもとに、次年度の大学間協働学習のプログラム内容について再検証を行った。

(3) 研究実施期間の 3 年目は、兵庫、福岡、沖縄の大学生 (外国人留学生、日本人学生) 28

名を対象に、Eメールによる大学間協働学習を実施した。Eメールのトピックは、2年目の実施内容の結果をもとに、参加者自らがトピックを選べるよう、選択肢を与えるようにした。プログラム実施中は担当教員による参与観察を行った。さらにプログラム実施前と実施後は、プログラム参加学生を対象とした質問紙調査を行い、学生からの回答結果を検証した。

4. 研究成果

(1) 初年度に実施した「観光英語」「通訳案内士」を対象とした科研費採択についての動向調査の結果、「科研費助成研究課題にみる観光英語の国内研究動向」として『中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要』第53号に掲載された。また、研究課題において兵庫県、福岡県の通訳案内士16名に半構造化面接を実施した結果、日本の大学間協働学習プログラムに必要な情報・教材内容が明らかになった。大学間協働学習に参加する学習者は、以下の3点、つまり、1)それぞれ郷土の地理的、歴史的、文化的特徴、2)外国人留学生たちの出身国、風習、宗教についての予備知識、3)日本の文化、風習などについて英語で的確に説明するスキル、を事前に学んでおく必要があることが明らかになった。その研究成果は、「地方文化発信のための通訳案内士を対象としたインタビュー：大学間協働学習に向けて」として『中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要』(第54号)に掲載されるに至った。

(2) 初年度に実施した日本の3大学からの42名の学習者による協働学習を実施した結果をもとに、プログラムに修正を加え、2年目に30名を対象とした協働学習を行った。調査結果と教師による振り返りから、1)学生がEメールの交換を楽しんでいたこと、2)Eメールの方法やエチケットを理解するにつれ、英語でコミュニケーションをはかることについて自信を持つようになったことが明らかになった。本研究結果は、今後の協働学習への改変と、本プロジェクトの継続につながる重要な研究成果となった。この検証結果は、令和3年5月に開催されたJALT Pan SIG Conference2021において、「Collaborative Learning in Higher Education in Japan: Toward an Intercollegiate Program」と題して大学間協働学習の実践報告を行った。そして、この研究成果は、「Collaborative Learning in Higher Education in Japan: Toward an Intercollegiate Program」として“Pan SIG 2021 Journal”に掲載されるに至った。また、協働学習を実施するなかで、教師によるリフレクションに関する実践研究を行い、令和4年3月に開催された56th RELC International Conference(国際学会)において、「Lessons Drawn from Collaborative Learning: Reflective Practice for Professional Development」と題した研究発表を行った。

(3) 3年目は、これまでの協働学習から得られた知見をもとに、修正を加えたプログラムを実施した。同時に、協働学習を通じた学習者の認識の変化について実践研究を行い、その研究結果を、令和4年8月に開催された大学英語教育学会(JACET)第61回国際大会にて、「Student Perceptions of Personal Development through a Collaborative Email Exchange Project」として研究発表を行った。さらに、令和4年11月に開催されたJALT2022において、「Japanese English Teachers' Reflection after Research Leave Year」として研究発表を行った。

(4) 最終年度となる4年目には、これまでの大学間協働学習の検証結果をまとめ、第50回外国語教育メディア学会(LET)九州・沖縄支部研究大会にて「地域の魅力発信のための大学間協働学習」というタイトルで研究成果を公表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Akiko TSUDA, Kayoko KINSHI, Christopher VALVONA	4. 巻 -
2. 論文標題 Collaborative Learning in Higher Education in Japan: Toward an Intercollegiate Program	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PanSIG 2021 Journal	6. 最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 津田晶子、金志佳代子	4. 巻 第54号
2. 論文標題 地方文化発信のための通訳案内士を対象としたインタビュー：大学間協働学習に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 31-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 津田晶子、金志佳代子	4. 巻 第53号
2. 論文標題 科研費助成研究課題にみる観光英語の国内研究動向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要	6. 最初と最後の頁 63-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件／うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Chris Valvona
2. 発表標題 Finding a Balance: The Use of Technology in Student Writing
3. 学会等名 the 58th SEAMEO RELC International Conference（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 津田晶子、金志佳代子
2. 発表標題 地域の魅力発信のための大学間協働学習
3. 学会等名 第50回外国語教育メディア学会 九州・沖縄支部研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kayoko KINSHI, Akiko TSUDA
2. 発表標題 Japanese English Teachers' Reflection after Research Leave Year
3. 学会等名 JALT 2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kayoko KINSHI, Christopher VALVONA, Akiko TSUDA
2. 発表標題 Student Perceptions of Personal Development through a Collaborative Email Exchange Project
3. 学会等名 大学英語教育学会 (JACET)第61回国際大会 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kayoko Kinshi, Christopher Valvona, Akiko Tsuda
2. 発表標題 Lessons Drawn from Collaborative Learning: Reflective Practice for Professional Development
3. 学会等名 56th RELC International Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akiko TSUDA, Kayoko KINSHI, Christopher VALVONA
2. 発表標題 Collaborative Learning in Higher Education in Japan: Toward an Intercollegiate Program
3. 学会等名 JALT Pan SIG 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金志佳代子、津田晶子
2. 発表標題 科研費プロジェクト：日本の地方文化を発信する大学間協働学習のための通訳案内士インタビュー
3. 学会等名 第218回東アジア英語教育研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	津田 晶子 (Tsuda Akiko) (30462089)	中村学園大学・栄養科学部・准教授 (37109)	
研究 分担者	Valvona Chris (Valvona Chris) (40532578)	沖縄キリスト教学院大学・人文学部・教授 (38004)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------